

昨年、米軍普天間基地の移設問題で沖縄は大きく揺れた。知事選で「県外」の民意が示されたにもかかわらず、進展する様子はない。ヤマトの一般の人々や各都道府県の首長に、沖縄の基地負担について関心を示す動きもほとんどみられない。「沖縄の人はやさしい、甘受してもらおう。もう基地問題は終わった。後は日米合意に沿って辺野古に移してもらおう」内閣・官僚の現状認識だ。ヤマトの人々も米軍基地が近くに來てはしくないのが本音だ。有事



おきなわ美術コラム

視線

上原 誠勇

の際にはまず軍事基地が標的にされるから怖い。日本は米国と対等な民主主義の国家のはずだ。今年は市民レベルから議論や運動を展開し、英知を結集してフェアな時代へ歩み出たいものだ。それにしても、このよう

な状況になると妙に「琉球政府立」という響きが懐かしい。そこには「自主独立」の可能性の選択肢と、沖縄人主体のニューアンスがあったからだ。米軍統治下にあったとはいえ、今になって「琉球政府立法院議会議棟」が大切な沖縄史の「モノ・ユメント」として思い出される。市民の保存運動が展開されたが、当時の県政の取り壊しは罪なことだったと思う。本土から来る観光客

壊された美術遺産

のコースに入れたら、ヤマト人の沖縄認識は根底から変化したにちがいない。それこそピカソの「ゲルニカ」に値するものだ。負の遺産として、広島原爆ドームに類する世界に発信する「美術建築物」だったのだ。さて、ストレス指数が高まる県内の状況下で沖縄美術界はどう反応したか？ 情けない話だが、現在の若い世代の美術家たちは政治的なテーマを好まないようだ。現状に反応した個展は、数人の年配のベテラン美術家のみであった。状況（政治）に無関心な傾向は沖縄に限ったことではないようだ。昨年、雑誌「広告」10月号に戦後日本の美術の展開図が載った。

2000年代に入ると女性美術家の台頭が目を引く。内容も個人的な作品が多い。フライングアート最前線に、照屋勇賢と高嶺格、柳幸典の3氏が「ひそやかな政治性」でくくられていた。現代美術のメジャーシーンでも社会派はほんのわずかだ。作家の外の社会（政治状況）への関心の薄さは、内向きな日本社会の状況と無関係ではないかもしれない。

今年は①沖縄の現実②軍隊の存在理由③生命——をキーワードに、脅威と矛盾から放たれるビジョンを見つけたほしい。美術画廊の立場から「生命——War」のテーマでアプローチする。

(画廊沖縄代表)